

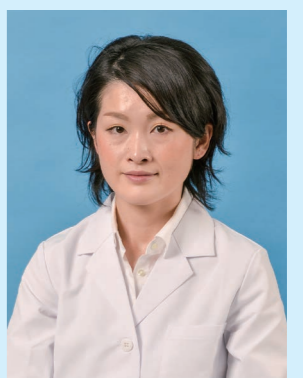
部位別
がん研究室

FILE 05
乳がん②

乳がんの外科治療

乳がんの診断がついたときには、各種画像検査を行い、他の臓器への転移（遠隔転移）がないかを確認します。遠隔転移がない場合には、手術や薬物・放射線療法などを組み合わせて治療を行い、遠隔転移がある場合には薬物療法を中心に治療を行います。今回は主に乳がんの外科治療について説明します。

（がん研究会有明病院の先生方にリレー形式でご執筆いただいています）



あべ ともみ
阿部 朋末

【がん研究会有明病院 乳癌外科】
2012年札幌医科大学医学部卒業。
同年から河北総合病院で初期研修終了後、2014年同院で外科後期研修医として勤務。2015年からはがん研究会有明病院にて勤務。現在は乳がんの外科領域に携わっている。

1 乳房の手術について

乳がんの手術には、乳房温存術と乳房全切除術があります（図1・2）。また、薬物療法を先行させてから手術を行う場合もあります。治療方針決定のためには、乳がんの進行状況や乳房内でのがんの広がり、乳がんの性質などを詳しく検査する必要があります。

乳房温存術の目的は、乳房内でのがんの再発率を高めることなく、美学的にも患者さんが満足できる乳房

図1 乳房温存術

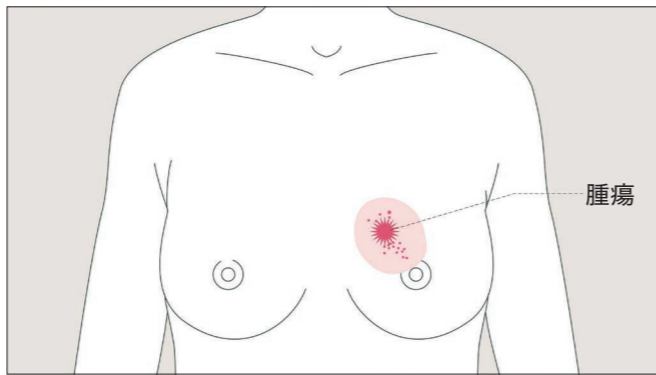


図2 乳房全切除術

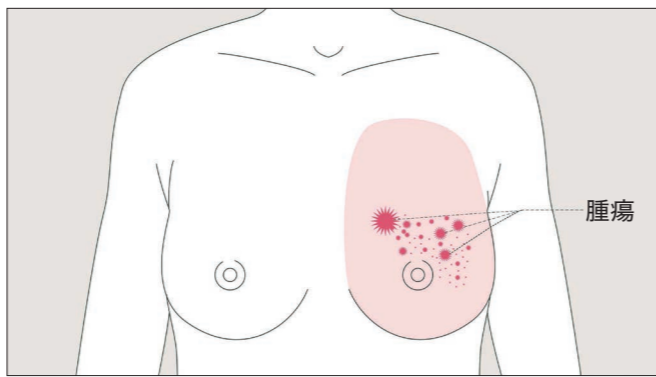
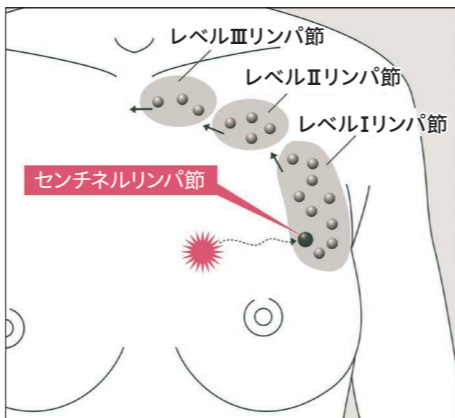


図3 センチネルリンパ節生検



を残すことにあります。そのためには、画像検査で病変の位置や切除範囲を正確に診断すること、そして適切に手術を行い、術後に放射線療法（原則的には必須）を行うことが重要です。乳房温存術はステージI、IIの浸潤性乳がんおよび非浸潤性乳がん（主に腫瘍径3cm以下）に適応となることが多いです。また、腫瘍径

が大きな場合でも術前薬物療法により腫瘍が縮小すれば温存術を検討することもあります。しかし、術後の病理検査の結果で温存した乳房にまだ多くのがん細胞が残っていると予

想される場合には、追加切除や乳房全切除術が推奨されます。

病変の広がりが広い場合や、病変を同側乳房の複数のヶ所に認める場合には、乳房全切除術が推奨されます。病変を適切に切除することができれば、乳房全切除術と乳房温存療法は同等の治療成績が得られることが示されています。

2 リンパ節の手術について

昔は乳がんの患者さんほぼ全員に腋窩郭清（同側腋窩（脇の下）のリン

パ節を取り除くこと）を行っていました。しかしこれには腕のむくみや、脇や背中感覚異常、さらに腕の可動域の制限など、患者さんにとって術後の悩みごとにつながる可能性があります。

そこで、腋窩郭清をすることなく、リンパ節転移の有無を調べる方法（センチネルリンパ節生検）が開発され、現在世界中で実施されています（図3）。触診や術前の画像診断などで腋窩リンパ節への転移がない場合にセンチネルリンパ節生検を行います。転移がなければそれ以上リンパ節はとりません。もしもセンチネルリンパ節に転移があった場合には、郭清へ移行することがあります。

しかし術前に画像診断で腋窩リンパ節に転移がなかった場合には、変異が見られることがあります。BRCA1、BRCA2遺伝子変異を持つ人には、乳がんだけではなく卵巣がんも発症しやすいことがわかっています（遺伝性乳がん卵巣がん症候群）。

現時点で遺伝子検査は、通常は自費診療となります（転移再発乳がんが特定の薬剤を考慮する場合は別です）。もし遺伝性乳がん卵巣がん症候群であることが判明した場合は、注意深く乳房や卵巣の経過観察を行います。乳がんをすでに発症している場合には、乳房内再発の危険性が高いことがわかっているので、手術は乳房全切除術が推奨されます。また反対側の乳房に対してリスク低減手術を行うことが、乳がん発症リスク低減のみならず生存率の改善効果が認められていることから、十分に遺伝カウンセリングを行い、本人の意向に基づき実施することが勧められます。同様に、妊娠・出産の希望や可能性があればリスク低減卵管卵巣摘出術を行うことも勧められます。なおリスク低減手術はこれまで自費診療で行っていましたが、2020年4月から保険診療となりました。今回は薬物治療について説明します。

パ節にがんの転移があると診断された場合は、腋窩郭清を行います。腋窩郭清をする目的は二つあり、一つは腋窩リンパ節への転移個数を調べるという「診断」の目的と、もう一つは再発を防ぐという「治療」の目的です。その後はリハビリや日常生活の注意点などを説明し、腋窩郭清後の合併症を最小限にとどめるようにします。

また、リンパ節転移が多い場合や病理検査でその他の再発のリスク要因を認めた場合には、局所再発を防ぐ目的で術後胸壁照射を行うことがあります。

3 乳房再建について

乳房再建は、手術によって失われた乳房を形成外科の技術によって再建する方法です。乳房を失うことで、温泉に入りづらい、体のバランスが悪いなどといった不便や不自由さを感じる人も多く、乳房を再建することでこれらの精神面や肉体的面の問題が改善することもあります。

再建には自分の体の一部を用いた再建（自家組織再建）と、人工乳房を用いた再建（インプラント再建）の二

4 遺伝性乳がんについて

乳がんの5〜10%は遺伝性であるといわれています。その中で、BRCA1もしくはBRCA2遺伝子と呼